

物恋ものこい

本から視線を逸らすと、床に落ちていたハンカチが目止まった。電車内にはアルコールの匂いが充満していたが、乗客は僕以外に酔ったおっさんしかいなかった。匂いの元はすぐにわかった。いつからハンカチが落ちていたのかわからなかったが、無視するにも可哀想に思えてきたので、拾っておいた。最寄り駅まであと四駅あったが、次の駅で降りた。無臭の空気は身に染みだ。

ほぼ無人のホームの中で、駅員は何をするでもなく突っ立っていた。

「落し物です。車内にありました」

「おや、わざわざありがとうございます」駅員はにこやかに笑った。恥ずかしくなって、僕はマフラーで口元を隠した。

次の日、再び車内で本を読んでいると、いつの間にか隣の座席にネックスが置いてあった。乗客は馬鹿騒ぎしている高校生のカップルだけだった。仕方なく拾い上げた。糸のように細い銀色の鎖に、綺麗な宝石が映えていた。再びどこか知らない駅に降りて、駅員に渡した。

「ご協力ありがとうございます」

「いえ、お構いなく」駅員はメガネを輝かせた。僕は白い息を吐いた。

その次の日に電車内で見つけたのは、クマのぬいぐるみだった。誰がこんなものを忘れるのか、疑いたくなるほど、大きなクマだった。優しい手つきで抱き上げて、にらめっこした。僕がなぜこれほど、落し物と遭遇するのか、さっぱりわからなかった。しかしどれも大切なもののように思えてきたので、見捨てることもできずに、駅員に渡すことにした。真冬の夜、駅のホームで、サラリーマンが大きなクマのぬいぐるみを抱きかかえていたら、みんなどのような反応をするのか、気になったが、その日もホームには誰もいなかった。

「大きな落し物ですね」

「はい、随分と」無意識にクマの右手を僕が撫でていると、駅員は再び声をかけた。

「あなたはきつといい人なんでしょうね」

「どういふことですか？」

「いえ、忘れ物なんて普通、みんな目もくれませんよ。あなたの親切心で助かる人はきつとたくさんいますよ」

「もしかすると、そうかもしれないね」僕は恥ずかしくなって、うまく返答ができなかった。

「それに、ついていきますね」

「何がですか？」

「お客さんには、何かモノを引き寄せる力があるんでしょうね。きっとこのクマは、あなたに拾われたがっていた」駅員の言葉を理解することはできなかった。

次の日は、僕の誕生日だったが、恋人がいるわけでもなく、実家に住んでいるわけでもなく、祝ってくれる人もいなかった。自分で誕生日プレゼントを買っていた。そのような習慣も、ここ三年ほど続けていたので、僕は慣れていった。

今年の誕生日プレゼントは、懐中時計にした。銀色に光る、まんまるい、秒針の音が心地よい、手のひらサイズの懐中時計だ。幼い頃、「不思議の国のアリス」で、ウサギが使っていたのを見て、ずっと憧れていたものだった。会社帰りに買って、時計の入った箱をカバンに入れて、手袋とマフラーを身につけ、電車に乗った。

相変わらず電車は人が少なかった。文庫本を取り出して、黙々と読んでいたが、電車に揺られて、夢うつつになった僕は本を閉じて、瞳も閉じた。

最寄駅に近づくと、本能的に目を覚ました。それは大げさな表現ではなく、会社に通って身につけたスキルの一つだった。僕は電車で寝ても、最寄駅の手前で必ず目を覚ますことができる。最高の能力だ。本をカバンにしまう時、異変に気付いた。時計がない。

駅に着くと、すぐさま駅員に声をかけた。

「すみません、あの、時計が届いてないですか？」慌てている様子は、駅員に伝わっているようだった。

「いつ、落とされたんでしょうか？」

「さっき、落としたのを気付いたんです」

「先ほどであれば、今届いているわけがないですよ」正論を言われて、何も言い返せなかった。僕はそのまま黙って、会社へ向かう電車に乗った。

電車が止まるたびに、見える範囲でホームを見渡した。誰か時計の箱を持っている人はいないかと、血眼になって探していた。もちろん、そんな探し方をしても、見つかるはずがない。しかし誰か、親切な人が拾ってくれていると信じて、探していた。

六個目ぐらいの駅のホームで、スーツを着た男が時計を手に持っていた。銀色の、丸い、懐中時計だった。ドアが閉まる直前に飛び出して、ホームに出た。男はこちらを見ていた。

息切れがして、僕は、手を膝について、呼吸を整えた。

「すみません、その時計、あなたの、ものですか？」切れ切れに質問をした。男は落ち着き払っていた。

「私のものではないですね」

「どこかで拾ったんですか？電車内とかで？」

「さあ、どうでしょう？あなたに答える義務はない」男はじつところらの様子を伺っていた。

「もしかすると、僕のものだと思うんですが、見せていただけませんか？」

「いや、それはないな」男は断言した。

「なぜそんなことがわかるんです？」

「この時計は私に拾ってもらいたがっていたからですよ」拾ってもらいたがっていた？クマのように？

「意味がわかりません」秒針の音が鮮明に聞こえた。僕の好きだった音だ。

「あなたは、少し調子に乗っていたんですよ。女性に褒められて浮かれる男っていますよね？そういう奴に限って、根拠のない自信を抱く」何を言っているのかわからなかった。

「上には上がいるんですよ。あなたが拾った落し物は、あなたに拾われたがっていた。しかしあなたはそれを手放した。それがいけないんだ。好意を持たれたものに対して、真摯に返事をしなければいけない。そうしなければ、自分が欲しいものに、肝心な頃合いに、見放されることになりますよ」呼吸は一向に整わなかった。今や過呼吸のように、しきりに酸素を求めていた。僕が一体何をしたのか、全く理解ができなかった。

「かわいそうに、持ち主の元を離れて、あなたに見つけてもらえた落し物たちは、残念ながら、持ち主の手元に帰っているでしょう。それらの気持ちがわかりますか？駆け落ちみたいなものですね、落し物はあなたを求めていた。しかしあなたは親切心を見せてしまった。すべてのものに平等に親切にするから、あなたは見限られるんですよ。平等ってのは酷なものです。特にあなたに恋してるモノにとっては、ね」心臓がズキズキときしみ始めた。

「すみません、少し、気分が悪いので、誰か呼んでもらえませんか？呼吸が苦しいんだ…」男は自慢げに、時計を眺めていた。

「アンティーク物は私は好きでね、まさに相思相愛なんです。だから私はこの時計が何が好きなのかわかる。この時計にとって、私はまさにベストパートナーなんです」

最初に触覚がなくなって、次に視界が見えなくなった。黒い空間の中で、声だけが聞こえ

た。

「まさにあなたは、恋煩いをしているんですよ。物からの愛を無下にすると、見向きもされなくなる。いや、できなくなるんですよ。モノと愛し合うことができなくなる。見ることも、触ることも、感じることもできなくなるんです」男の足音が遠ざかっていく音が遠ざかっていったが、時計の音だけが聞こえた。やがて懐中時計の秒針の音も聞こえなくなった。